

マリー・ローランサンの絵画と詩

永井 藤樹

長野県にある国内唯一の「ローランサン美術館」が閉館になってから4年が経ち作品の散逸が心配されましたが、2015年6月20日～8月23日まで「浜松市美術館」で「マリー・ローランサン展」が開催されていることがわかりました。

浜松市美術館は、「浜松城公園」の中にあり、緑濃い低木林に囲まれたこじんまりとした美術館です。500点以上あるローランサンの作品のうち、70点が展示されていました。



マリーは、1883年パリで生まれ画家を志し、アカデミー・アンベールで勉強中にブラックと知り合い、彼からキュビズムの影響を受け、さらにモンマルトルでピカソとも知り合ったこともあって、一時は「キュビズムの女神」と、もてはやされましたが、理屈っぽいキュビズムの絵画理論は、彼女の感性に馴染めないものがあつたようです。私はマリーの絵に

キュビズムの残影をいくらか見ることはできましたが、キュビズムの深みに嵌らず、彼女本来の「簡潔で華やかな夢見る少女像」という独自の画風を作りあげたことを喜ばずにはいられません。

詩人で美術評論家であったギヨーム・アポリネールと知り合ったのもピカソのアトリエでした。二人は恋に落ち同棲を始めましたが、アポリネールにモナ・リザ盗難事件の嫌疑が掛かり拘留されたこともあって、彼への恋愛感情が冷めてしまいます。しかし、彼の方はマリーが忘れられず、二人の出会いの場であった橋への想いを詠った詩が彼の代表作「ミラボー橋」です。「ミラボー橋の下をセエヌ河が流れ/われらの恋が



流れる/わたしは思い出す/悩みのあとには楽しみが来ると/日が暮れて 鐘が鳴る/月日はながれ わたしは残る」という詩は、軽やかなメロディの歌となって歌われています。マリーもアポリネールの影響を受け、詩を作っています。堀口大學に仮託した「日本の鶯」や「馬」、「小鳥」などの題名を持つ詩です。大學もマリーのために「ローランサンの扇」という詩を作っています。ローランサンの「日本の鶯」という詩は、次のようなものです。「彼は御飯を食べる/彼は歌を歌ふ/彼は鳥です/彼は勝手な気まぐれからわざとさびしい歌を歌ふ」彼というのは、もちろん堀口大學のことです。この詩の意味は、よくわかりませんが、次のような内容のようです。「私は特別とりえのある人間ではないけれど、ふと寂しい気持ちになる時がある。その時は心のおもむくままに寂しい歌を歌おう」堀口大學がローランサンを詠った「マリー・ローランサンの扇」は、次のような詩です。「灰色がお前の空だ/紅と紫がお前の虹だ/おお消え行く虹よ/幻の美しさ」



大學は、ローランサンに出逢った時の様子を次のように書いている。「畫室の前に立ち止まって、私は呼鈴の釦に指を置いた。静かに中から戸が開いて水晶のやうに透明な顔をもった、未だうら若い女が姿を現した」

大學が「ローランサンに恋をした」ということになっているが、どうであろうか。9歳年上の彼女に母性に似た感情を持ったのではないだろうか。また、ローランサンの方も、繊細な感

性を持つ若者に好感を抱いたのではないだろうか。

第二次大戦中、フランスを占領したドイツ軍によって自宅を接収された苦労の中にあっても、彼女は創作活動を続けた。晩年、フランスを代表する大女優になったジャンヌ・モローの妹を養女にしたものの、2年後の1956年心臓発作により死去。享年72歳。離婚後はバイセクシャルであったという。

参考文献等

澤野久雄『虹の上の舞踏—哀愁のマリー・ローランサン』求龍社

柏倉康夫『敗れし國の秋のはて—評伝 堀口九萬一』左右社

2015. 7/2NHKBSプレミアム「堀口大學 遠き恋人に関する調査」

堀口大學訳詩集『月下の一群』岩波文庫

2015. 6/23 詩游会第二回資料 『堀口大學』